

ちよつと大人の 恋のお話

短編集

キミイ



目次

喧嘩

プライド

最後の夜

またいつか

君のいない道へ

愛を教えて

君の思い出を胸に

癒し NEW STORY

シャボン玉 NEW STORY

君と僕と胃袋 NEW STORY

喧嘩

大人夫婦のお話

ごくごく普通の家庭。

結婚18年目の雪と剛とそしてお年頃英太との三人暮らしのちょっとした1コマ。

超大人な甘いショートショートラブストーリー。



朝、鏡を覗く。

ヤダ、隅がある。

タベ本読み過ぎて遅かったからな。

「はあ〜」

溜め息をつくと、後ろに長男の英太がいた。

「母さん、邪魔」

英太はすっかり私より大きくなって、ピチピチの肌で私と同じ鏡に映っている。

「はい、はい、お年頃は大変ね」

私が退くと英太は鏡を独占した。

英太はここから20分は今から動かないだろう。

髪の設定に命を掛けている。

勉強もそのぐらい真剣になればいいのに...

16歳の英太は最近随分と洒落っ気が出てきた。

どうやら結構モテるらしい。

当たり前だ。

誰が産んでやったと思ってるの？

母さん昔は美人でモテたんだから。

父さんだって、昔は...あら英太、私似かと思ってたけど、最近剛に似てきたわ。

若い頃の剛は爽やかだった。

今は...髭なんか生やしちゃって、爽やか度0。

まあ、似合ってると言えば似合ってるけど...

あっ、喧嘩してたんだっけ。

あの髭親父め...

「行ってきます」

玄関から剛の声がした。

「.....」

「行ってらっしゃい」

英太だけが言う。

私は無言。

剛は喧嘩しても、朝にはケロッとしてる。

私はフツフツ...

夕べの夕食の時だった。

私がリビングのライトの掃除を剛に頼んだ。

剛は、「ちっ面倒だな」と言ったのが発端だ。

我が家のライトはかなり天井が高く、小さな私では脚立に乗っても届かない。

その点剛は背が高く、剛なら届くのでそこは剛の担当なのだ。

それなのにあの言い草は何!?

私は頭に来てこう言った。

「じゃあ、いいよ。英太にやらせる」

「英太、届くでしょ」

「何で、俺...」

「口答えしない。小遣い減らすよ」

「...っつ」

英太は黙った。

そこから、剛とは話していない。

無言のまま食事は終わり、無言のまま寝た。

くだらない。

実にくだらない。

夫婦喧嘩は犬も喰わぬとは正にこの事だ。

私は洗濯物をバンバン叩いて干した。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

英太が学校へ行った。

私も洗濯物を干し終わり、流しを片付けて、パートに出掛けた。

私の仕事は訪問美容部員。

一軒一軒訪問して、お喋りして、エステをしたりして化粧品を買ってもらう。

だから私自身手を抜けない。

常に美は磨いてるつもりなんだけど、16の息子の美肌には適わない。

英太はニキビも出来ないツルピカ肌だった。

夕方帰宅して、洗濯物を取り込み、畳む。

ひと息ついて夕飯の支度だ。

剛には作りたくないな。

でも英太が食べるだろうし、仕方がなく作る。

「ただいま」

剛だ。

いつもは帰るメールするのにしてこなかった。

今何時？

7時...定時か...

剛は真っ直ぐ風呂に入った。

剛は風呂から出ると冷蔵庫から缶ビールを出して、ダイニングテーブルの椅子に座った。

気まずい...

非常に気まずい。

いや、気まずいのは私だけで、剛の何事もなかったような平然とした態度がムカつく。

英太、早く帰ってきてよ。

剛と二人きりだった。

私は無言で食卓に皿を並べた。

その時、携帯がなった。

英太からのメールだ。

『今日、友達と遊んで帰る。ご飯いらない』

ガーン!!

こんな時に限って英太ちゃ〜ん!

仕方無く、剛と無言の食事を取る。

食事が終わり、剛が「ちょっとコンビニ行ってくる」と言って、家を出た。

はあ〜疲れた。

私は食卓を片付けて風呂に入った。

風呂からあがると、剛はもう帰ってきていた。

冷蔵庫を開け、水を飲もうとしたら、私の好きなプリンがあった。

プリンなんかで吊られるもんか。

私はちょっと食べたかったけど、プリンを後目に水を飲んだ。

剛はリビングのソファでビールを飲みながらテレビを見ていた。

水を飲んでいる私を見て、「プリンあるよ」と言った。

「知ってる。太るからいらない」

可愛くない言い方だが、私はまだ怒っているのだ。

剛が立ち上がって、空の缶ビールを流しに置き、新しいのを冷蔵庫から出した。

立ったまま水を飲んでいて私を通り過ぎず、後ろに来て立ち止まった。

「まだ、怒ってる？」

「・・・・・・・・」

「ねえ、怒ってるの？」

耳元で言って後ろから抱きついてきた。

顔を擦り寄せ、頬にチクチクする髭があたった。

「あ～暑苦しい！もう怒ってないから離れて」

「良かった。プリン食べな。雪は太ってないから」

そう言って、私の尻をポンと叩いた。

「ただいま～」

英太だ。

「おかえりー」

英太は真っ直ぐ風呂に向かった。

剛はソファで新しい缶ビールを飲みながらまたテレビを見ていた。

私は...プリンを食べた。

食べ物には罪はない。

プリンは甘くてちょっぴり優しい味だった。

食べ終わってから、ノートパソコンを開いて、ネットで新しいアクセサリを物色していた。

英太は風呂も長い。

いったいどこをどう洗えばあんなに長く入れるのかしら？

出てきたと思ったら、またドライヤーだ。

ドライヤーの音が止まり、ようやくリビングに顔を出したかと思ったら、キッチンで飲み物をガブ飲みして二階へ上がってしまった。

11時か...

そろそろ寝よう。

私はパソコンを閉じ、洗濯のタイマーを仕掛け寝支度をした。

剛はソファでうたた寝してる。

「剛、私もう寝るから」

「...ん」

剛はよろよろ起き上がった。

「おやすみ」

一足先に二階の寝室に入った。

ベッドで少しだけ読書をする。

活字を読むと眠くなるから。

その時、剛が寝室に入ってきた。

剛は寝室の鍵を閉めた。

剛は私の横に、横になったと思ったら、上に乗ってきた。

読んでいた本を取り上げ、上から見下ろした。

「雪ちゃん、ライト今度の休み、俺が掃除する」

「うん」

「ごめんね」

「うん」

ようやく謝った剛に私は許す。

ごめんねのキスは髭でチクチクした。

お互い微笑んで見つめ合ってなんだかホッとしたのも束の間、剛は今度は熱くとろけるような甘い口付けをしてきた。

私は剛の首に手を回す。

仲直りの後のメイクラブはいつもより、優しい。

E N D

2012.7.9作成

プライド

浮気を知った妻のお話

浮気をされた！！
あなたならどうする？



あなたの腕が私の肩にある。

でも顔は、テレビを見ている。

最近私を見ていない。

ねえ、カズ...

こっち見てよ。

聞こえないよね。

私の心の声...

カズの携帯が鳴る。

相手を確認して、立ち上がる。

メールなのに...

トイレでそれ一々見るんだ...

ねえ、カズ...

知ってるよ。

そのメール、この間楽しそうに話してた女の子でしょ。

私は今、別れの予感を感じている。

それはひたひたと足音はしない。

コツコツともしない。

ただ、ひっそりと私に近づいてきている。

私は必死にそれに気づかないふりをしている。

夜...二人で寄り添う筈のベッドで背を向けるあなた。

いつからだろう。

優しい温もりを分け合ってた頃がもう随分昔に感じる。

ねえ...カズ

私はあなたのいったい何？

あなたの愛は何処へ行ったの？

あなたの背中に問いかける。

答えはない...

私は小さく丸まって子猫のように夜を過ごす。

あなたとの距離は1 c m...

でも心の距離はもっと遠いよね。

今夜のメニューはあなたの好物の唐揚げだよ。

あなたはちょっぴり喜んで食べた。

私は単純だから嬉しくなる。

ねえ、カズ...

美味しい？

私もっとカズが喜ぶ事するよ。

もっとあなたに笑顔をあげるから、こっち見てよ。

あなたは機嫌良くビールを飲む。

私は一緒に飲みながら少しだけ、胸の開いたシャツで寄り添う。

ねえ、カズ...

私を抱いてよ。

私にあなたの愛を見せつけて...

ほら、そうすれば私安心して笑えるの。

あなたは呆気なく毘にかかる。

でも抱かれて分かった。

ほんの少し残っていた私への愛を今あなたは使い果たした。

繋がっても寄り添っても、心の距離は縮まらない。

私は疲れ果てて眠るあなたの背中に人差し指で書く。

ねえ、カズ...

サヨナラ

あなたは優しいから、言えないんだよね。

だから私から言ってあげる。

私から振ってあげる。

ねえ、カズ...

バイバイ

最後にあなたの寝顔にキスしてあげる。

ありがとう。楽しかったよ。のお礼のキス。

私は夜明けと共に家を出た。

ふふふ...私ちょっと格好いいじゃない。

置き手紙はしない。

メールもしない。

涙?...まだ実感ない。

思いつき。

でも、私を動かしたのはプライド。

私を愛さない男なんて、まっぴらごめんだ。

一年ぶりの実家。

私は自分のベッドで久しぶりに眠る。

そこで初めて物凄い孤独が押し寄せてきた。

ねえ、カズ...

あなたも感じる？

私がない孤独。

涙は枯れる程流れた。

泣いて、泣いてあなたも私から流してしまおう。

あの笑顔も温もりも全て...

今日はメイクも変えよう。

美容院にも行こう。

ちょっと気分転換になる。

鏡の中の私はいつもよりちょっと綺麗。

新しい服を買おう。

いつも着ないような服にしよう。

うふふ...何だか別人になった気分。

ほら、街を歩けばみんな私を見てる。

ねえ、カズ...

今の私見せてあげたい。

そして後悔すればいい...

あなたから何度も電話とメール。

私は全て無視してる。

本当は出たい。

本音を言えば、声が聞きたい。

でも出て何を話すんだろう。

あなたは私を愛していない。

私から終わりにしてあげたんだから、あの子の所へ行けばいい。

私を気にせず、抱けばいい。

強がっているのは分かってる。

でも泣いてすぎるのは嫌。

それが私のプライド。

このプライドは夜だけ崩れる。

ねえ、カズ...

寂しいよ。

今頃、あなたはあの子に愛を見せてるのでしょうか。

何故、私じゃないの？

あんなに優しくかったあなたは何処へ行ったの？

あんなに甘い言葉くれたのは全て嘘？

苦しくて切なくて恋しくて...

私は小さく丸まって泣くだけ泣いて眠りにつく。

実家に居ると懐かしい友達に会いたくなる。

私は懐かしの仲間と飲みに行く。

優美に美咲に拓也にそして...隼人。

気の合う仲間には元気をくれる。

酔って騒いで歌って、今夜の夜は寂しくなさそうだ。

携帯にはまだあなたからの連絡がある。

もういいのに...

お互いもう違う道を歩き出している。

私が出ないのはプライド。

そしてこの先の自分の為。

ねえ、カズ...

今日の私、笑ってる。

あなたがいない横は寂しいけど、そのうち慣れるから。

先日会った隼人からメールがきた。

『今夜は二人だけで飲まない？』

隼人は学生の頃一度だけキスをした事がある。

結局、幼かった私達はそれ以上進まなかったが、隼人が私に好意がある事は気づいていた。

気づいていたけど、隼人も気持ちを告げる事はなかったし、私も仲間としての関係が気に入っていた。

『いいよ。何処？何時に行けばいい？』

私は隼人に返事を出した。

今夜は何か起こる予感がする。

ねえ、カズ...

本当にお別れかもね...

私の愛もあなたから消えそうだよ。

ジントニックを飲む私の横にいるのはあなたじゃなくて隼人。

懐かしい昔話で盛り上がる。

一瞬隼人の視線が熱く感じた。

その視線を無意識に逸らす私。

余計にお酒が進んでしまう。

「いつまで、こっちに居るの？」

「分からないわ。ずっと居るかもしれないし、居なくなるかもしれない」

私は答えをはぐらかす。

「俺、今一人なんだ」

「ふ～ん」

オブラートを重ねた誘惑の言葉に私は気のない返事をする。

悔しいけれど、飲めば飲む程あなたの温もりが恋しくなった。

あなたの代わりに、隼人が私の肩を抱いた。

「今夜、俺んち来ない？」

返事に迷っているその時だった。

「絵里！」

聞き慣れた声で私を呼ぶ声がした。

振り返ると、あなたがいた。

あなたは真っ直ぐ私を見ていた。

ツカツカと不用心に私と隼人並んでいるカウンターに来て、私を見下ろした。

「何してるの？」

あなたがそんな事聞ける立場？

なのに私の心は今凄く喜んでいる。

あなたが私を探しにきてくれた事。

そして、かなり嫉妬している事。

「見れば分かるでしょ。楽しくお酒飲んでるの」

「分かるよ」

私はジントニックをもう一口、口に流し込んだ。

「帰ろう」

「嫌」

とうとう隼人が口を挟んだ。

「絵里、嫌がってる。帰れよ」

「そういう訳にはいかない。絵里は僕の妻だ」

あなたはよくそんな事がハッキリ言えるわね。

だけど事実だ。

あなたは私の腕を掴み、無理やり店から出した。

「止めてよ、みっともない」

店から数メートル歩いて、ようやく腕を離れたあなた。

「ごめん、ちょっと魔が差した。本当にごめん。絵里...お願いだ！ 帰ってきてくれ。絵里が居なくなって分かった。俺はやっぱり絵里じゃないと駄目なんだ」

何なんだ？その目は...

まるで捨てられた子犬みたいじゃない！

これじゃ私が悪役みたいじゃない！

「カズ、私はあなたが居なくても生きていける。あなた以外私を欲しがる人もいる。なのに、あなたの元に帰る理由が見つからない」

子犬にそんなに簡単に甘い顔はしない。

私にはプライドがある。

妻というプライドだ。

「絵里...」

またそんな切なそうな顔をしないで。

うっかり手を伸ばしそうになるのを慌てて下ろした。

「絵里、君を愛しているんだ。俺は君が居ないと何も手につかない。君が出て行ったあの日から、仕事も手につかなくて休んでる」

そっそれは困るわ。

有給は別の時に使ってもらいたんだから。

などと意外にも現実的な事が浮かんだ。

この時点で、私はあなたをもう許している。

「お願いだ...

君が許してくれるなら、君が傍に居てくれるなら何度でも謝るから。絵里...心から謝ります。反省してます。

帰ってきて下さい」

「例え、帰っても失った信用は簡単には戻らない」

これは本心だ。

あなたは私の愛を裏切ったのは事実。

あなたの愛が一瞬でも消えたのも事実。

「一生かかっても、君の信用を取り戻す」

キッパリと私の目を見つめて言うあなたの瞳には嘘はなかった。

「いいわ、チャンスをあげる。でもこのチャンスは一度きり。次はないわ。
よく覚えておいて。ちょっとでもよそ見したら私にはちゃんと分かるのよ。隠したって無駄だから」

「絵里！」

喜んで抱きつくあなたはやっぱりじゃれつく子犬のようだった。

でも、この温もりが私の元に戻ってきた事を一番喜んでいるのは、あなたを愛しているこの私だ。

「絵里、もう離さない」

急に真剣な目で私を見つめ捉えたあなた。

私は鼓動が高鳴る。

ゆっくりと唇から注がれるあなたの愛は前よりずっと熱く真実の味がした。

私達は二人で並んで歩き出した。

ねえ、カズ...

この先はまだまだ長いよ。

あなたは真っ直ぐ歩ける？

でもまた迷った時は私がちゃんと手を繋ぎ直してあげる。

妻というプライドの戦闘服であなたを取り巻く全ての外敵からあなたを守ってあげる。

ねっ、カズ。

完

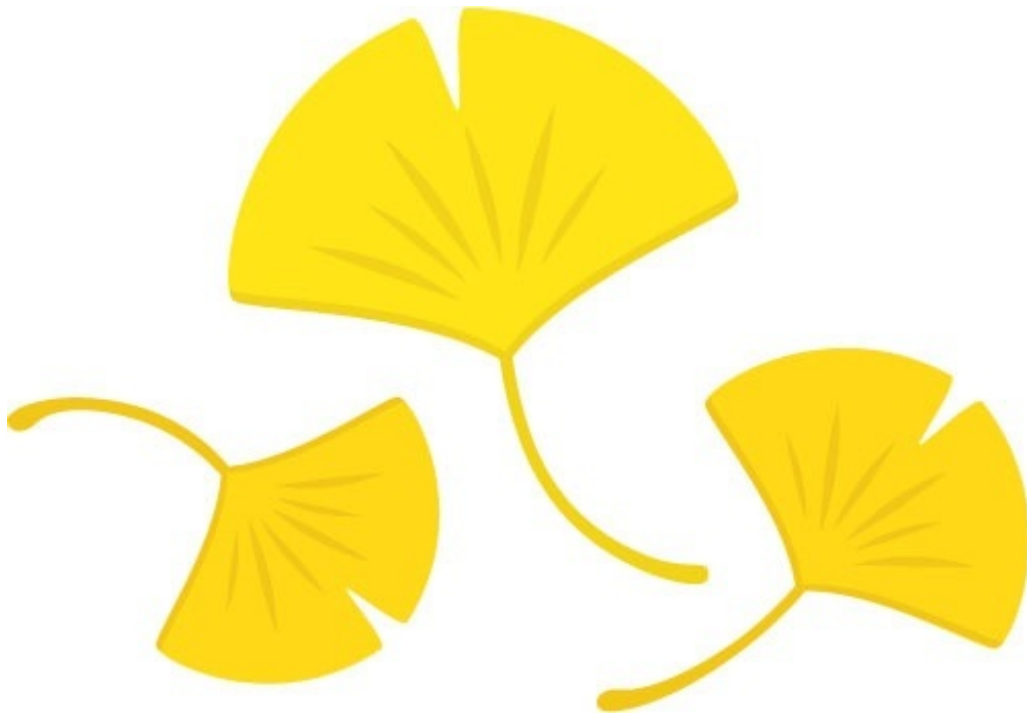
2012.8.12作成

最後の夜

一組のカップルのお話

もう気付いてるさ
君の気持ちがここにないってこと

多分...僕もだ...



僕はいつものごとく週末は君のアパートに向かう。

君のアパートまでの道のりを歩くのは慣れたものでもう一年だ。

アパートの前の銀杏の木が黄金に色づいていた。

冷たい風が僕の頬を叩いた。

「さみっ・・・」

僕は足早にアパートの階段を駆け上がった。

カンカンカン・・・と階段の鉄の音が響く。

君の部屋のブザーを鳴らすと、眼鏡をかけひつつめ髪が君がドアを開けた。

僕は黙って君の部屋に入った。

「トモくん、ご飯は？」

「食べてきたよ」

「そう・・・」

君はセンターテーブルの前に膝を抱えてテレビの続きを見始めた。

僕がこの部屋に来てから君は僕を一度も見ない。

僕は上着を脱ぎ、壁際のベッドに腰掛けた。

お互いもう語る事はない。

君も僕ももうお互いに興味は無くなっているから。

テレビの音だけがこの部屋のけだるい空気を消していた。

いつからだろう？

こんな感じになったのは・・・

お互い気付いているのに別れを切り出せないままなんとなく一緒にいる。

僕はテレビに興味がなく、携帯いじり始めた。

「トモくんビール飲む？」

「ああ、もらう」

「冷蔵庫にあるから」

君は僕の為に立ち上がることもしない。

僕は冷蔵庫からビールを出した。

ビールは残り一本だ。

プルタブを開け、一人でビールを飲んだ。

君は酒は飲まないもんな。

「寒くなったね。暖房入れようか」

「ああ、外も寒かったよ」

君はリモコンで暖房を付けた。

久しぶりに動いたような機械音がブーンと鳴った。

しばらくするとあたたかい風が僕にあたった。

これが君のぬくもりだったらどんなにいいか。

僕は傍に居るのにとても君が遠く感じた。

携帯ゲームしながらチビチビビールを啜っていると、君は一度僕の方を見た。

「どうした？」

「別に・・・」

きっと君は別れを切り出したいんだろう。

なぜだろう？

その時、僕は咄嗟に君の隣に座って君の唇を塞いだ。

味気ないキスだ。

君の唇は冷たく動かない。

君の気持ちが全く伝わってこないのになぜ僕はキスをしているんだろう？

「する？」

君は眼鏡越しにあたりまえのように言った。

「ああ、しょう」

君は眼鏡を外しセンターテーブルに置いた。

そして僕達は自分の服をためらいなく脱ぎ捨てベッドにもぐりこんだ。

君を抱くのはもう何回目だろうか？

付き合い始めの熱い抱擁はなく胸の高鳴りもない、いまひとつ盛り上がりのないメイクラブ。

だけど僕は思った。

きっと君を抱くのは最後だろう。

そう思ったら君の身体が愛しくて、僕は君の身体に僕を残すように抱いた。

君が今度誰かに抱かれる時、「トモくんはこうだったなあ」って思い出してくれればいい。

事が終わると君は余韻に浸ることもなく服を着て、眼鏡を掛けまたテレビを観た。

僕はぬるくなったビールを飲み干し服を着た。

「なあ、チカ・・・」

「なに？」

「俺さ、明日休出なんだ」

「そっか、帰る？」

「ああ、帰るよ」

僕は本当は休出なんてないけどウソをついた。

上着を着た。

「トモくん、ビール・・・冷蔵庫の中に残ってるでしょ。それ持ってって。残っても邪魔になるだけだから」

「ああ、分かった」

僕は冷蔵庫の中の最後の缶ビールを取り出した。

「じゃあな」

「うん」

僕が玄関のドアを閉める最後まで君は僕を見なかった。

これが最後の君の姿だろう。

階段を下りる鉄の音が、月夜の晩に鳴り響く。

冷たい風が銀杏の葉を幾枚も落とした。

街頭がそれを僕にハッキリと見せた。

握りしめた缶ビールが冷たくて手が凍えそうな程冷たかった。

僕はそれでも歩いた。

いい加減手が冷たくて通りかかった公園のベンチで缶ビールを開けて一気に流し込んだ。

空になった空き缶を思い切り握りつぶし、ゴミ箱に放り投げた。

カラカランとナイスストライクだ。

「おし、行くか」

僕は立ちあがり歩き出し電車に乗った。

僕の家まで二駅だ。

仕事先は反対方向。

多分もうこの駅で乗車することはないだろう。

電車の出入り口付近に立ち外を眺めた。

ネオンや車のライトが街を彩っていたけどやけに淋しく見えた。

さよなら・・・チカ・・・

君との愛は終わってしまったけど

君の事忘れないよ。

楽しかった思い出もある。

熱く愛し合った時もある。

君に夢中だった僕はもういないけど

確かに存在してたから。

それを忘れない・・・

二駅目で僕は降り、街の中へと消えていく。

完

2012.10.10作成

またいつか

五年ぶりに再会したカップルのお話

あなたの事大好きだった

でも終わった恋...

偶然再会してしまったら？

大人の切ないショートラブストーリー



この街を訪れたのは5年振り。

随分雰囲気も変わった。

あのバーだけはまだ変わらずひっそりと佇んでいる。

私は一歩踏み出し、そのドアを久しぶり開ける。

「いらっしゃいませ」

カウンターのバーテンは新しい若い子で見知らぬ顔だ。

私は一人カウンターに座りスクリュードライバーを頼んだ。

キーとドアが開く。

「いらっしゃいませ」

私の一つ席を飛ばした椅子に男性が座る。

「ウォッカをロックで」

聞き覚えのある低い声。

私が声の主を見ると、彼も私を見た。

懐かしい顔に驚きお互い一瞬沈黙が走る。

「よう」

「うん」

素っ気ない挨拶から始まった。

「久しぶり」

「ノブは元気だった？」

「まあね」

と同時にノブは席を変え私の隣に座った。

隣から懐かしいノブの香りがした。

「ハルミと会うの五年振りか...」

「そうだね...」

たわいもない挨拶的な会話。

ウォッカのロックがノブの前に置かれ、ノブはグラスを軽く回してから一口飲む。

「相変わらず、強いお酒飲んでるんだ」

「関係ないだろ」

「そうだね」

私はシガレットケースからタバコを一本取り出し、口に銜え火を付けた。

ふうっと煙を吐き出し、変な緊張をほぐす。

「煙草吸ってるんだ」

「うん」

「いつから？」

「ノブと別れた日から」

「どうして？」

「ノブが煙草嫌いだったから」

「ふうん」

静かな沈黙がまた押し寄せる。

「体に悪いぞ」

「大酒飲みだって体に悪いわ」

「相変わらずだ」

「えっ？」

「相変わらず気をつえー女」

そう言って懐かしそうに私を見て笑った。

その笑顔に私の胸はちょっぴり苦しくなる。

「こっち戻ったの？」

「いえ、仕事で来ただけ。明日には帰るわ」

「そうか」

少し残念そうにも見える横顔が少し嬉しかったりする。

私は煙草を消し、スクリュードライバーを飲み干す。

「会計を…」

私が帰ろうと席を離れようとするのとノブが私の肩を掴んだ。

「もう帰るのかよ」

「明日早いの」

「なあ、もう一杯付き合えよ」

「ダメよ」

ノブの手が私の肩から離れた。

バーテンが伝票を私に渡す。

私はお金を払い、釣りは要らないと断った。

「冷たい女」

「もう一杯飲んだら懐かしさで泣き出しそうなの」

ノブは黙ってた。

黙ってグラスのウォッカをガッと喉に流した。

「じゃあな」

「うん、またいつか」

私はバーを後にした。

月日は止まる事はなく過ぎてゆき、今では私も二児の母だ。

しかしあれから10年経った今でも酒屋やスーパーでウォッカの瓶を見るとノブを思い出してしまう。

まだ呑んでるのかな...

私は未だに煙草を止めていない。

END

2012.10.11作成

君のいない道へ

遠距離恋愛のお話

「ごめんね、こーちゃん」

最後の君の声が未だに胸に染み付いて離れない。

それでも僕は...歩き続けなければ



僕がりっちゃんと離れ離れになったのは今年の桜が散った後...

『行ってきます』と元気に手を降って笑顔で別れた。

僕も笑顔で見送った。

だってその時はりっちゃんは、帰ってきたら僕のお嫁さんになるって信じてたから。

りっちゃんは仕事で一年契約で東京へ行った。

僕とりっちゃんは高校一年からずっと付き合っていたんだ。

僕は専門学校へ二年行き、無事卒業して今の会社に就職。

りっちゃんも学校は違ったけど専門学校を出て就職。

僕とりっちゃんはもう6年も付き合っていたんだ。

結婚しようってお互いお金も貯めていた。

それがたった...たった一本の電話で終わりなんて信じられないよ。

りっちゃんとは毎日夜10時に電話で話してた。

毎日代わり番こに掛け合って...

『こーちゃん』

『りっちゃん』

『今日はなんか変わった事あった？』

『ないよ。あっお昼に食べたオムライスが美味しかった』

『へえ、良かったな』

『こーちゃんと食べたいよ』

『・・・うん、りっちゃん、もうちょっとだから頑張れ』

『こーちゃん、もうちょっとってまだこっち来て三ヶ月だよ』

『ああ、そうか』

『そうだよ...』

『りっちゃん、好きだよ』

『こーちゃん、そういう事言うと会いたくなっちゃう』

『俺だって会いたいよ』

『こーちゃん...寂しい』

りっちゃんは泣き出しそうな震えた声だった。

『りっちゃん、目閉じて...』

『なんで?』

『いいから、閉じて...』

『閉じた』

『今からキスするから』

『...うん』

チュッとリップ音をりっちゃんに聴かせた。

『うん...』

『りっちゃん、待ってるから』

『うん、待っててね』

僕とりっちゃん是这样やって会えない夜を、何日も声を電波に乗せて語り合っていた。

こうして一年...たった一年我慢すれば、りっちゃんは僕の胸に戻ってくるって思ってた。

夏休み...りっちゃんは帰ってくるかと思った。

だけど、仲良くなったお友達とハワイに行くって帰ってこなかった。

僕は夏のボーナス貯めて、りっちゃんに婚約指輪買うつもりだったから夏休みずっと遊ばないで節約してた。

その頃からだろうか...

りっちゃんが毎日の電話を三日に一度にしようって言い出したのは...

『こーちゃん、電話代勿体無いからさ、毎日は止めようよ』

『りっちゃんが大変ならいいよ』

『三日に一度くらいで』

『分かった』

僕は東京は物価が高いから大変なんだろうって思って、りっちゃんのことを何にも疑っていなかった。

だけど...多分この時すでにりっちゃんは新しい恋に走り出していたんだと思う。

少し夜が涼しくなった頃、りっちゃんから掛かってくる筈の電話が掛かって来なかった。

僕は携帯のランプを何回も確かめた。

じっと...じっと待ってたんだ。

けども掛かってこない。

一時間待ったけど掛かってこない。

結局堪えられず、僕から掛けた。

『りっちゃん？』

『...んん...こーちゃん？』

『どうしたの？今日はりっちゃんが掛ける日だよ』

『あつご、ごめん。ちょっと風邪気味で寝ちゃった』

りっちゃんはコンコンと咳をした。

でも僕はその咳が嘘だって分かったんだ。

あれから一ヶ月...

気づけば電話は僕からしか掛けていない。

それも何だかりっちゃんの声が前と違って聴こえて、日に日に掛けづらくなっていた。

僕の心のざわつきは毎日のように襲い、どうしていいか、もがいていた。

りっちゃん的笑顔、泣き顔、怒った顔...

僕はりっちゃんの全てを誰よりも知っている。

16才だった幼い少女の頃からだ。

大丈夫、りっちゃんは今忙しいんだ。

僕はそう自分に言い聞かせ、心のざわつきを抑えていた。

だけどりっちゃんはとうとう僕に言ったんだ。

『こーちゃん...私好きな人出来た。
だからこーちゃんと結婚出来ない』

僕の不安は現実となって目の前に突きつけられた。

『りっちゃん、何言ってんの？ちょっとした気の迷いだよ。
りっちゃん、俺達ずっと一緒だったじゃん。
会って数日の人の方が好きだって言うの？』

『...こーちゃん、私、離れちゃうとダメみたい。
今までずっとこーちゃんが一緒に、
こーちゃんしか見てなかったから分からなかったけど...』

『りっちゃん、しっかりしてよ。結婚するんだぜ、俺達』

『できないよ...』

『俺、どうしたらいいんだよ。りっちゃん居ないと生きていけない』

『ごめん、こーちゃん』

りっちゃんは電話を切った。

最後の『ごめん、こーちゃん』のりっちゃんの声がいつまでも僕の耳から離れなかった。

僕は...

振られた？

何だか信じられなかった。

だってそうだろう？

りっちゃんは...僕のりっちゃんだったし、これからもそうなる予定だったんだから。

りっちゃんにとって僕は初めての彼氏で、りっちゃんの初めては全部僕が相手だ。

僕だってそうだ。

僕はりっちゃんだけを見てきたし、りっちゃんだけを愛してきた。

これからだってりっちゃんだけだ。

そう簡単に僕達が育んできた愛が壊れるわけがない。

僕はもう一度電話を掛けた。

だけど何度掛けてもりっちゃんはお出なかった。

今度はメールした。

返信はなかった。

それでも僕はりっちゃんにメールを送り続けた。

僕のりっちゃんへの想いを文字で綴り続けた。

『りっちゃん、愛してる。

りっちゃん以外愛せない。

りっちゃん、もう一度考え直して。

りっちゃんを本当に愛せるのは俺だけだ

りっちゃんを守っていくから。

りっちゃん...お願いだ、もう一度俺を愛して』

だけど返信は一度もなかった。

数日考えたけど、僕は諦めきれなかった。

とうとう飛行機に乗ってりっちゃんの元へ直接行った。

会わなきゃ、会って抱きしめればりっちゃんは僕の愛を思い出す。

りっちゃんのアパートに辿り着き、ドアの前で深呼吸した。

僕は六年前りっちゃんに告白した時の気持ちに戻って、物凄く鼓動が早くなった。

少年だった僕。

ほら、見た目は大人になってもりっちゃんを想う気持ちはひとつも変わってない。

僕は息を飲みブザーを押した。

応答がない。

僕はドアを叩いた。

「りっちゃん！りっちゃん！俺だよ！光一だよ」

呼び掛けても何の反応もなく、僕の声だけが虚しく響いた。

すると、哀れに思ったのか隣の住人がドアを開けて言った。

「その人、先週越したよ」

えっ...？

「どこに越したんですか？」

「知らないよ」

そう答えて隣の住人はドアを閉めてしまった。

嘘だ！嘘だ！

りっちゃんが僕の前から消えるなんて有り得ない。

僕は走った。

何処に走ってるか分からなかったけど走りまくった。

気がついたら何処かの公園だった。

落ち葉が舞い散って、地面が落ち葉で見えない中、僕は行き倒れのように倒れ込んだ。

僕は初めて別れを実感して泣いた。

りっちゃんが消えた。

僕は泣き疲れて、ようやく自分を取り戻した。

もう半分諦めてるけど、りっちゃんに一目だけでも会いたかった。

りっちゃんと僕を繋ぐものは携帯しかなかった。

僕は携帯を取り出しメールを打った。

.....

件名 りっちゃんへ

本文

りっちゃん、今東京に居ます。

りっちゃんのアパートに行ったけど、引っ越した後でした。

りっちゃん..会いたい。

会いたいよ。

お願いだ、もう一度だけりっちゃんに会いたい。

一目会って...君をこの目に焼き付けておきたい。

最後の願いを聞いてくれ...

東京駅で待ってる。

光一

.....

返信はなかった。

だけど僕は東京駅に向かった。

きっとりっちゃんは来ないだろう。

東京駅の入り口で僕はじっと立っていた。

冷たい風が僕の愛を奪い去っていくようだ。

その時メールが鳴った。

りっちゃんだ！

僕は期待しながらメールを開いた。

『こーちゃん、私が見える？

こーちゃんの30メートル先にいる。

私が見える。

こーちゃんが見えるよ。

でも、来ないで...

近づかないで。

そこから見えたら手を振って。

お別れだよ。

こーちゃん...私...ママになるの。

だから、こーちゃんの所には戻れない。

ごめんね、こーちゃん。

六年間ありがとう』

僕は顔を上げ人混みの中にりっちゃんをようやく見つけた。

僕は思い切り手を振った。

そうしたらりっちゃんも振っていた。

僕は30メートル先のりっちゃんを目に焼き付けた。

たとえりっちゃんが僕を裏切っていたとしても、六年間愛し合ったのは事実だ。

りっちゃんはきっと僕が傍にいないこの東京で人生を変える大きな出来事があったんだろう。

僕の知らない間に...

りっちゃん、さようなら。

りっちゃんの様子は暗くてよく分からなかったけど、多分りっちゃん泣き笑いしてる。

りっちゃんが去っていく。

りっちゃんはすぐに人混みの中に消えてしまった。

りっちゃんは僕の居ない人生を選んだ。

僕もりっちゃんの居ない人生をたった今歩き出す。

僕のりっちゃんへの想いはまだ胸にある。

これをどうしていいかは分からない。

だけど僕は歩かなくては...

君のいない道を...

E N D

2012.10.12作成

愛を教える

ある不倫中の女性のお話

私が本当の愛を知ったのは24歳の時。

愛を探し求めた先の絶望の中で突然私の前に降りてきた。

その愛を教えてくれたのはあなたでした。

あなたの愛だけを信じ私は生きてゆく...

ちょっぴり長めの短編です



私達はメールでこっそり会う約束をする。

『〇〇ホテルに8時』

私はそのメールでときめく。

もう何回もこうして会っているのに、私の胸は張り裂けそうになる程喜んでいるのだ。

ホテルに着くとロビーに彼が居るのを確認。

私達は目で合図する。

彼がフロントでチェックインすると、少し距離を置いて後について行く。

同じエレベーターに乗り二人きりになるのを確認すると、彼は私の手を握った。

私達は人目を気にしながらエレベーターを降り、部屋に入る。

何故なら私達の関係は許されない恋だから。

部屋に入ると、彼と私ははようやく安堵し見つめ合い微笑む。

そして握ったままの手を引き寄せ、抱き締める。

私は苦しくなる。

「明菜...ずっと抱きしめたかった」

彼は私に甘い言葉を注ぎ始める。

彼の全てが私に向かっていると思うと私は嬉しくて、私の全てで彼を受け入れたくなる。

「金崎さん...」

「今だけは誠って呼べよ...」

「誠...さん...」

「明菜...愛してる」

彼は愛を口にしてから私の唇に彼の唇を重ねた。

甘く切ない時間が今から始まる...

私達をもう誰も止められない。

限られた時間の中で彼は私を全身で愛す。

今だけ...今だけは誠さんは私のもの。

私も彼に全身で愛を伝える。

愛してる...愛してる...

二人が重なる夢の時間。

二人が溶けだす愛の時間。

私達がこの禁断の愛に堕ちてしまったのはもう一年も前。

午後10時、彼は一人ベッドから抜け出しシャワーを浴びる。

夢の時間は終わりだ。

着替え終わると、彼は私に声をかける。

「明菜、君とずっと一緒にいたいよ。だけど帰らなきゃ、あの冷え切った家に...
明菜、もう少し早く君に出逢ってれば... 明菜、また来週だ。それまで君を胸に想うよ。愛してる
」

そう言い残し私を置き去りにするのだ。

なんて悲しく切ない思いを私にさせるの。

「誠さん...お願い、もう一度抱きしめて」

彼はきつく私を抱きしめた。

「誠さん...」

「明菜...」

私と彼はこんなに...こんなに愛し合ってるのに、どうして離れなきゃいけないの？

今にも泣き出しそうなもどかしい思いを抑えて、私達の抱擁は終わる。

私は悲しく微笑み彼を見送る。

彼は名残惜しそうにそれでも冷酷に部屋を後にした。

私達の出会いはありふれたオフィスでの出会い。

大学卒業して就職したばかりの社内で始まった禁断の恋だ。

一目でお互い恋に落ちていたが、彼が既婚者なのは知っていたしすぐには関係を持てなかった。

だけど、彼が資料室で後ろから抱きしめた時、私はこうなる事は予想出来ていた。

だって私達は求めていたのにずっと我慢していたから。

二人きりになってしまえばもう歯止めが効かないだろうって思ったた。

それが現実になってしまった。

私に罪の意識はないかと言われれば嘘になる。

だけど彼には子供がない。

奥さんとは紙切れ一枚で繋がってるだけだ。

私は世界中の誰よりも彼を愛しているし、彼の愛も私だけだ。

だからいずれ離婚して私だけの彼になるって信じていた。

そう、あの日まで...

友人のヒロカが子供を出産し、私は出産祝いに産婦人科へ訪れていた。

ヒロカの病室に行くには待合室を通り抜けなければならない。

私は足早に通り過ぎようとした時だった。

私は居るはずのいない人を見かけてしまった。

誠さん...？

彼は妻らしき人の肩を抱きいたわるように待合室の椅子に座っていた。

その肩を抱かれた女性は少しだけお腹に膨らみがあった。

う...そ...

私はとっさに気づかないふりをして通り過ぎた。

でも頭の中はパニックだ。

あれだけ会う度に私に愛を降り注いでいたくせに、何故奥さんを妊娠させているのか理解出来なかった。

妊娠しているという事は、私と関係を持ちながら夫婦生活も同時に進行してるということだ。

どこが、冷え切った家なの!?

私は裏切られた。

体中が怒りで震え、治まらなくなっていた。

会って問いただしてやる。

私はヒロカの出産祝いもさっさと済ませ、自宅へ帰り彼にメールしようとした。

『聞きたいことがあるの。奥さん妊娠してない？私病院で見かけたのよ』

送信ボタンを押そうとしたが、その指が止まった。

もしこれを送ったらどうなるの？

彼は私の元から去っていくの？

それともいいわけをして関係が続くの？

私は...どうしたいの？

その日から私は答えは分かっているのに、延々と苦悩した。

彼を愛している。

私だけのモノにしたい。

でも彼には子供が出来た。

奥さんとは別れない。

私と奥さんを同時に愛する彼が許せない。

愛と憎しみが交差し、私の心はもがき苦しんでいた。

そして一週間で過ぎ、いつものように彼から逢引きのメールがきた。

私は恐る恐るそれに応じる。

会いたい。

会って抱きしめて否定して欲しい。

でも、認めて捨てられたら？

気持ちが行き来するまま私は彼にいつものように会った。

「明菜...会いたかった」

彼はいつもと変わらず甘い言葉をかける。

「待って...」

彼の抱擁を拒むと驚いた顔をした。

「どうした？明菜」

「金崎さん、奥様妊娠したでしょう？」

「え...？」

「私見たのよ。病院で」

彼はクスクス笑い出した。

「明菜、あれは妹、妹の香子だよ」

「うそ！」

「嘘じゃない。香子はシングルマザーなんだよ。体調がイマイチだって言うから、俺が連れて行った」

「信じられないわ」

私はいたわるようなあの彼を思い出すとどうしても信じられなかった。

「あんまり、見せたくないけど...」

彼はそう言って、スマホを取り出し写真を見せた。

それは確かに幼い頃の誠さんと先日見た女性の写真だった。

「明菜、嫌な思いをさせてしまいすまない。でも、俺は明菜しか愛していないし、君なしじゃもう生きていけないんだ...」

よかった.....なら....

私はこの時恐ろしい程の独占欲が体から吹き出すのを感じた。

「じゃ、離婚して」

そして自分でも驚く言葉を口にしていた。

「部長の娘なんだ」

彼はいいわけした。

別れるつもりないんだ...

私はいずれはと思っていたのにとてもショックだった。

「私...こんな日々はもう嫌。離婚する気がないなら金崎さん、終わりにしましょう」

私は彼を愛しているけど、自分のプライドが強くさせた。

めいっばいの強がりの別れの言葉。

彼は黙っていた。

私を誰よりも何よりも私を好きなら、仕事だって生活だって全てを投げ出しても手に入れる筈。

それが出来ないのなら本当の愛とは言えない。

私は掛けに出たのだ。

「明菜...そんな残酷な事言わないでくれ。それは少し考えさせてくれ。ちゃんと考えるから」

彼はそう言った。

そう言った後に、

「それよりも君の愛を補充させてくれ。俺カラカラなんだ...」

そう甘く囁き私を抱きしめた。

『考える』...この言葉に私は希望の光を感じた。

そして私はまた堕ちてゆく。

夢の続きをみたくなってしまう。

「ほら、名前呼んで」

「誠さん...ああっ...」

「明菜、明菜...愛してる...」

私の中に入り込み愛を注ぐ彼の愛は本物だと信じている。

禁断の魅惑の蜜の味は私達をより夢中にさせた。

悲しい恋...してはいけない恋...

でも止められない。

それが私達をより強く引き寄せる。

まるで悲劇の二人の気分。

もっと早く君に出逢っていれば...

酷い運命ね...

でもいけない...このままでは...

分かってる...

でもあなたの愛なしでは生きてゆけない...

悲しいの...

分かってる...

今だけ、今だけ愛し合おう...

君という時だけが僕を幸福にさせるんだ...

私も...私もあなたに抱かれている時だけが幸せを感じる...

愛してる...ひとつになろう...

このままあなたに溶けていきたい...

ああ、溶けよう...

ほら、もっと熱くなって...

熱い...

ほら、溶け出した...

君は僕のもの...

あなたは私のももの...

こんな日が更に三ヶ月続いた。

なのに彼の答えは出ない。

「誠さん、離婚は？」

「もう少し待ってくれ」

最近の私達の夢から覚めた時の会話だ。

ある本に書いてあったが、不倫女が結婚を求めてはいけないって...

でも、私未婚なんだし、好きな人との結婚を求めて何が悪いの？

と思ってたけど、その本は本当だった。

彼は私と会う回数を減らし始めた。

「明菜は最近焦り過ぎだ。離婚なんてそんな簡単なもんじゃない。少し距離をおきたい」

「距離をおいてどうするの？」

「ちゃんと一人で考えたい」

彼は別れの言葉は決して口にしない。

私はそれに希望を抱いてしまう。

でもそれってズルいともう一人の私が思っている。

もう終わりかも...

そんな気がした。

社内で彼が昇進する噂を聞いた。

「金崎さん、スピード出世よね！」

「当たり前じゃない！奥さん、部長の娘よ。出世の為の結婚じゃない。あの人...仕事命って感じだもね」

「あ～いるいる、自分一番って男。私は勘弁だね」

そんな噂話を耳にして、私は妙に納得してしまった。

答えが出ない理由。

離婚すると言うことは会社を辞める事だ。

せっかく昇進するのに私を選ぶ訳がない。

彼の事を想ったらそんな残酷な事を求める事が出来なかった。

私は決着をつける決意をした。

私は彼を呼び出した。

いつもの曜日、いつもの時間、いつもの場所。

私達はいつものように部屋に二人きり。

思えば彼との思い出なんてこの部屋で愛し合った事だけだ。

食事や映画なんてもちろん許されない。

彼は用心に用心を重ねてこのホテルを選んだのだ。

「明菜…」

彼は私の手を取った。

「金崎さん、昇進おめでとう」

そう言ったら、手を引っ込めた。

「まだ、決まりじゃないよ」

「決まったようなものだよ。奥様、部長の娘さんなんだから」

「君まで悲しい事言うんだな」

彼は横を向き俯いた。

「あの頃は人を愛する意味が分からなかったんだ。分からないまま結婚してしまった...
君と先に出逢っていればこんな事にはならなかった。君と愛し合って結婚してたと思う」

彼は苦しんでる。

それは私だけじゃない。

私は彼の手を取った。

彼は指を絡めて握りしめた。

胸がギシギシと痛んだ。

「愛してる、明菜...」

どうしようもない溢れる想い...

それが重なりそうになった。

だけど私は手を祓った。

「なら会社辞めて、私と一緒に成れる？」

私は彼の目を見て聞いた。

「それは...」

困っている。

明らかに彼は困惑の表情だ。

「嘘よ。ただ、ちょっとでも考えて欲しかっただけ。全てを捨てて二人で生きる事を...
終わりにしましょう」

私は彼から身を退く決意を口にした。

私は立ち上がり窓の外を眺めた。

「明菜...ごめん」

彼は私を後ろから抱きしめた。

抱きしめたそのぬくもりは、あの日資料室で彼が初めて抱きしめた時と変わらなくて切なくな
った。

どうしてこんな事になってしまったんだろう。

彼の気持ちは何も変わってないのに。

でも私の中であの病院での光景をきっかけに何かが変わったのだ。

密かに期待していた彼の離婚。

希望のない恋と分かった今先に進む道はない。

私は窓から見える東京タワーを睨みつけた。

「奥様、お大事に」

そう言い放ち、涙を流しながら彼の腕を振りほどき部屋を出た。

追ってきて...呼び止めて...

愛してるって叫んでよ...君と生きると言って...

心の中で懇願しながら私はホテルを後にした。

でも、彼は追って来なかった。

散々愛してると言いながら、君なしでは生きていけないと言いながら、彼は私のいない人生を選
んだのだ。

私達は本当に終わった。

一年と三ヶ月の私達の愛の日々は儚く終わった。

私は...仕事を辞めた。

ここに居るのは辛すぎる。

また懲りもせず彼を目で追ってしまう。

私は全てを心機一転しなければ自分がおかしくなりそうだった。

彼の声、彼の指、彼の胸...髪...全てが恋しくて恋しくて...

苦しいの...

寂しいの...

お願い...愛してるって抱きしめて...

優しいキスを私にして...

私は彼を求める気持ちと必死で闘っていた。

それは日毎に増し、寂しいとか苦しいとかもう越えていた。

愛の抜け殻だ。

何もかもが色褪せて見えた。

体中がカラカラなのだ。

どれだけ彼の愛で潤されていたんだろう。

『もっと早く君に出逢っていれば...』

彼の言葉が蘇る。

私は夜すすり泣く。

奥さんより先に出逢っていれば私達は愛を成寿させれたんだらうか？

終わらせた恋なのにそんな事を考えてる自分が嫌で仕方がなかった。

昼間は救いがあった。

親と同居していたからだ。

昼間は母と話したりして孤独は少し紛らわせた。

お茶を啜った。

「お母さん、私少しノンビリしていい？」

「あなたの人生好きにきなさい」

母はそう言った。

だけど、母では私の乾いた心は埋まらなかった。

私は三ヶ月何もしなかった。

何もしないと言うより何も出来なかった。

そろそろ、働かなくちゃ...

お金も厳しくなってきた。

これが現実だ。

私は干からびた体を奮い立たせ、仕事を探し始めた。

だけど不景気でまともに就職先が見つからない。

なんの目的も希望もない私。

手っ取り早くお金が欲しくて水商売を始めた。

店は愛のない寂しい人が集まる場所。

私に甘い言葉をかける客。

その偽りの言葉で私の心を取りあえず埋めた。

そして干からびた体を偽りの愛で満たしてくれた。

みんな魔やかし...

私は分かっているながらも、それにハマっていった。

偽りの囁きで私を抱く男達。

それで、客が増え時給が上がった。

店では、客と寝て最低女と罵られたが私はもうそんな事で傷つかない程心が麻痺していた。

両親に体裁悪くてとうとう家を出た。

もう私の人生はたった一度禁断の実を食べたせいで狂ってしまった。

私の部屋の花瓶にバラが妖艶な匂いを放っていた。

私の客がここに来る時に持ってきたバラだ。

バラが赤く見えた頃が懐かしい。

今では黒にしか見えない。

大して素性も知らない男に名前を呼ばれ、愛してると言われた。

私は気がついた。

ああ、男ってやりたければ、甘く囁くものなんだ。

愛してるって簡単に言えるんだ。

バカみたい...

私は脚を広げながら上で動く男が機械のように感じた。

涙が出てきた。

彼の言葉を全て鵜呑みにした愚かで情けない自分に。

大人の愛に憧れて手を出した幼い自分に...

でももう這い上がれない。

体を起こす力もない。

空っぽの私に偽りの愛を入れて去っていく男達...

私はただの汚い器だ。

死んでしまいたい。

でもそんな勇気もない。

私はどん底だった。

暗闇でもがくのに疲れ果て、泣くのも諦め、ただじっと横たわっていた。

ある日、店がやけに暇な日があった。

私は客を呼ぼうと携帯を取り出し物色していた。

その時バーテンの望月君がチラリと私を見た。

「何？」

「...いや...」

「気持ち悪い人ね」

「...悲しい女だなんて」

そうポツリと言った。

「ちょっと仕事でしょっ！これであなたのお給料だって出てるんだから！」

私は怒りを露わにして言ってやった。

周りの女の子はビックリしてたけど、皆、望月君の肩を持つ事を口々に叫んだ。

「客と寝るなら風俗行け」とかそんな事だ。

ママは止めようとして間に入ったが、怒りは治まらず、思わず言ってしまった。

「もう、辞めます」

私は後に引けず店から飛び出した。

あてもなくトボトボと歩いた。

派手なドレス一枚じゃ寒くて凍えそうだ。

追い討ちをかけるように静かな雨が降ってきた。

ネオン雨で潤んで見えた。

街の雑踏の中私は独りぼっちだ。

どうしようもない孤独が押し寄せた。

生きてる意味が分からなくなった。

誰かと肩がぶつかり睨みつけられた。

その目は軽蔑の眼差し...

誰も...誰も私を必要としてくれない。

涙は枯れ果てていた筈なのに、また頬を伝った。

誰か...誰か私を愛して...

心の奥でもう一人の私が叫ぶ。

雨は降り止まず私の体を芯から冷やした。

もう歩けない...

その時だ。

「明菜さん」

私を呼ぶ声に私は振り向いた。

「寒いでしょう」

そう言って私に上着を掛け傘に入れて優しく笑いかけたのは、バーテンの望月君だった。

「誰のせいでこんな寒い思いしてると思ってんのよっ」

と憎まれ口を叩きながら嬉しくて余計涙が出た。

望月君は悪びれるつもりもなく

「ママが迎えに行けって言ったけど...」

と言いながら私をふわりと抱きしめた。

「あそこには帰さない。あそこにいたら明菜さんダメになる」

「えっ？」

私は望月君の顔を見上げた。

「俺が君を救い出す」

真剣な目でも優しい瞳で私を見つめた。

「だけど、私汚れてる...」

私はそう言った。

だって本当の事だから。

「大丈夫、今、雨で流したろ？」

にっこり微笑む望月君が天使に見えた。

私はまた男に騙されるんだろうか？

そう思いながらも望月君にしがみついた。

とても優しい香りと雨の匂いだ。

今だけでも嘘でもこの優しさに甘えたい。

そう思ったこの時、私は先週24歳を迎えたばかりだった。

そして...

望月君の愛は本物だった。

三年後...私は望月君の実家に一緒に帰り、みかん農園を手伝っている。

私の名前は...

望月 明菜

望月君...晃は私の大切な旦那様。

私に本当の愛を教えてくれたのは彼でした。

晃の時々囁く『愛してる』だけを私は信じて生きていく。

今日もみかんはオレンジ色に神々しく光っている。

晃の笑顔と共に...

end

2012.10.16作成

君の思い出を胸に

妻に先立たれた男の話

君を忘れられない
君がいなくても君を愛す



一昨日、愛犬のペックが死んだ。

昨日、ペット葬儀屋を呼んで焼いてもらった。

ペックは小さな白い箱になった。

人間のお骨よりエラく小さいなあ。

僕はペックのお骨を仏壇に置いた。

ペックは三年前から発病して長くはないって言われていたし、最後はもう頑張らなくていいって思う程弱ってたから、正直悲しみより楽になれて良かったと思った。

僕の膝にペックの片割れのジュニが乗ってきた。

ジュニはペックの妻として迎えたが、去勢していたペックとの間には子はなかった。

「ジュニ、おまえも独りぼっちになったなあ」

ジュニの丸くてフワフワした毛で覆われた背中をさすった。

あたたかく生き物らしい。

さて、仕事に行くか。

僕はジュニを膝から下ろし、立ち上がった。

仕事は自動車の販売の営業だ。

今の営業所にきて5年。

不景気だがなんとかノルマはこなしている。

今日はお得意さんの点検日で外回りだった。

営業所からお得意さんの家まで二十分。

代車走らせ住宅街の街路樹に入った。

青々と元気に葉を付けた木々が青空によく合っていた。

世の中はこんなに明るいな...

僕は少し胸が苦しくなった。

十字路の赤信号で、大きく深呼吸した。

そつなく今日の仕事を終え、営業所を後にした。

帰り道のいつもの弁当屋で夕飯を買う。

今日は鯖の味噌煮弁当がオススメだって言われたから、それにした。

オマケにインスタントの味噌汁を貰った。

毎日、買ってるから店員も気前がいい。

お弁当を片手に下げ、二つ目の角を右に曲がると、4軒並んだ建て売り住宅が見える。

その中の左から二番目の明かりの付いていない家が僕の家だ。

僕はその明かりの付かない我が家の玄関の鍵を慣れた感覚だけで開ける。

カチャリと開くと同時に、真っ暗の中ジュニが二、三度吠えた。

玄関の明かりを付け僕を認識すると、嬉しそうに尾を振った。

「ただいま、ジュニ」

僕はスリッパを履き、家の中を進みリビングの電気を付け、ダイニングテーブルにお弁当を置き、カバンを椅子に置いた。

ジュニが足下でソワソワしている。

餌の催促だ。

僕はキッチンへ行き、ジュニの器にドッグフードを入れ、ジュニの前に置いた。

ジュニは無心にガツガツ食べまくっていた。

いいよな...犬は...

旦那が亡くなったっていうのにその見事な食欲が羨ましかった。

僕はネクタイを緩めながら、冷たい浴室に向かった。

湯を張るのが面倒で独りになってからはずっとシャワーのみだ。

熱めのシャワーでさっさと済ませた。

よれた洗いざらしのTシャツといつものスエットを履く。

リビングに戻り冷蔵庫からビールを出した。

ジュニは腹が満たされ、ソファで寛いでいた。

ビール飲みながら、鯖の味噌煮弁当をつつきだした。

味が濃い。

郁美が作ると薄めの味付けだったな...

僕は箸を置き、テレビのリモコンを手に取り付けた。

くだらないお笑いだった。

クスリと独りで笑った。

笑う事は出来るようになった。

だけど、本気で笑った事はない。

郁美が亡くなって二年も経つのに、僕はまだ独りに違和感を感じている。

缶ビールが一本飲みきる頃、なんとか鯖の味噌煮弁当を食べ終わった。

インスタント味噌汁は朝に取っておく。

二本目の缶ビールはソファでジュニを胸に乗せながら飲んだ。

テレビはお笑いも終わってスポーツニュースだ。

それを見終わり、僕は寝室に向かった。

ダブルベッドに独り横たわると真ん中に寝ればいいのに端に寄ってしまう。

枕を引っ張り、右側に寄って一番寝心地の良い場所で体を沈めた。

暗闇の中目を閉じると、郁美が笑ってる顔が浮かんだ。

郁美と行った新婚旅行から最後に『行ってらっしゃい』と玄関で見送る笑顔まで走馬灯のように駆け巡る。

思い出すのは、いい思い出ばかりだ。

『郁美...ペックがそっちへ行ったよ。郁美も寂しくないだろ...俺はジュニとなんとかやってるよ』

僕は心の中で郁美に話しかけ眠りについた。

夜中、喉が乾き目が覚める。

僕は無意識に左側を手探りで郁美を探していた。

ある筈のいない郁美の肉体。

僕は起き上がり、リビングに向かい、水を一杯飲んだ。

郁美が亡くなってから必ず、夜中に目が覚めるんだ。

まるで、郁美に起こされてるみたいだ。

ここからはベッドに戻ってもなかなか寝付けない。

何度も何度も寝返りを打つ。

そして、郁美を抱いた日々を思い出す。

郁美の小さな耳や首筋、小ぶりの胸...

足を広げると恥ずかしそうに顔を背ける横顔...

僕は郁美を愛したくなる。

郁美の肉体はないのにそれが欲しくて堪らない。

ダメだ、眠れない。

僕はベッドに腰掛け、一人自慰にふけた。

精液を放つとようやく落ち着き、またベッドに横たわり眠りに落ちた。

朝が来てまた、変化のない日々が始まる。

湯を沸かし、インスタント味噌汁を朝飯代わりに啜った。

ジュニに朝の餌をやり、仏壇に手を合わせる。

「行ってきます、郁美」

僕は会社に向かった。

今日も晴天だ。

E N D

2012.10.31作成

癒し

不倫中の男のお話

僕は普通のただの男

こんな僕をきっと世の女性は

最低と呼ぶのだろう

それでも僕には手放せない人がいる



「お疲れ様～」

今日も一日の仕事を終えいつもの家路を辿る。

僕は歩きながらスマホを開いた。

『こんばんは！仕事終わったよ』

そう打つとピロリンとラインが直ぐになった。

『お疲れ様』

『今日は仕事でトラブって大変だったよ』

『わっ大変だったね』

そこから僕は今日の何気ない話を家に着くまでする。

マンションの前まで来ると

『家に着いたよ。また明日ね』

『うん、また明日ね』

最後の挨拶をしスマホをオフにした。

「ただいま～」

「おかえり～」

僕の妻がいつものように返事をした。

ラインをしている相手は、俗に言う愛人ってやつだ。

僕はただのサラリーマンだし、彼女を金で囲っているわけでもない。

いわゆる不倫関係。

僕にとっては恋人だ。

恋人恭子とはかれこれ二年ほどの付き合いになる。

ちょっとした飲みで知り合ったのがきっかけだ。

最初こそ盛り上がり暇さえあれば逢引を重ね、狂ったように身体を合わせたが

今は・・・落ち着いて二ヶ月に一度会えば良い方だ。

だからほぼ互いの繋がりはメール...今はラインだな。

それも最初こそ暇さえあれば話していたが、今では仕事帰りの家までの帰り道のみ。

たいした話はしていないし、疲れている時もあるから面倒とを感じる時もある。

なのに・・・

僕は彼女から離れられない。

必ず連絡をしてしまう。

僕の頭の片隅に恭子は小さく座っていて、待っているような気がするんだ。

「ちょっと、早くお風呂入っちゃってよ！私明日も早いんだから」

飯の後にゴロゴロ寛いでテレビを観ていたら妻の芳江に突かれた。

「ああ、分かったよ」

適当に返事をしてまたテレビを観ていた。

芳江とはもう結婚して十年・・・

なんてことはないどこにでもいる普通の夫婦だ。

娘の朱音も9歳になってちょっと生意気になってきたが目の中に入れても可愛い宝だ。

べつに不満はない。

風呂から上がると、部屋はもう電気が消されていた。

寝室のダブルの布団では芳江が寝息を立てている。

僕は起こさないようにそっと掛け布団を捲ってそこにそっと横たわった。

「武、起きて、布団上げる」

「ん・・・」

翌朝、芳江にいつものごとく起こされた。

我が家の朝は早い。

娘の朱音の弁当もあるし、洗濯もあるから芳江は出勤前まで高速で動き出す。

僕はわりと出勤までのんびりだ。

趣味のベースをちょっと弾こうか・・・

とベースを手を取ったら、芳江に睨まれた。

「・・・・・・・・あ、なんか手伝おうか？」

「朝食の皿！洗っといて！それから米も研いでおいて」

「はいよ・・・」

まあ、共働きなんだからこんなもんだ。

べつにに不満はない。

皿を洗い、米を研ぎ、炊飯器にセットした。

さて、そろそろ時間だ。

僕は家から出て駅に向かう。

本日も晴天なり・・・

会社に向かう電車は相変わらず通勤ラッシュで車内はぎゅうぎゅう詰めだ。

押し競饅頭の戦いが始まる。

停車駅で人が入れ替わりさらに押されてドアに身体が押し付けられた。

その時ピロリンとラインの音が鳴った。

ん？僕か？

たぶんそうだろう・・・

相手は恭子だと思う。

どうせ朝のおはようだ・・・

押し競饅頭の戦いは終わり、ようやく下車できた。

嘆息をひとつ吐き、スーツのよれを正し、社に向かう。

風が吹いて少し気持ち良かった。

さて今日も頑張りますか・・・

こんな変わりのない毎日が過ぎてゆき、ようやく日曜日がやってきた。

ああ、今日のはのんびりしたいな・・・

リビングでゴロンとすると、朱音が腹に飛び乗ってきた。

「ぐえっ、おいパパ死ぬぞ！もうでかいんだから勘弁してくれ」

「ちえっ、パパつまんないの。ママ～どっか行こうよ！」

朱音が僕から降りて芳江のところに行った。

芳江は忙しそうに掃除機をかけていた。

「ママお掃除で忙しいから、パパにどっか連れていってもらいなさい」

芳江はピシャリと言い朱音を僕に託した。

仕方がない・・・家にいたってガアガア掃除機で落ち着かないしな。

「朱音、ママ忙しいからパパと出かけよう」

「どこに？」

「公園でいいだろう？」

「やだよ、つまんない」

「じゃあ、どこだよ」

「ゲーセン」

「・・・・・・・・・・」

ゲーセンは金がかかる。

こういう時、芳江は逃げる。

一度金を請求したが揉めた。

「ゲーセン！ゲーセン！」

朱音がうるさく言い出した。

「わかった、少しだけだぞ！パパ貧乏なんだから」

芳江に嫌味の一つを聞こえるように言い、朱音を連れてゲーセンに向かった。

休日は家族サービスだ。

ほら、いたって普通の休日だ。

べつに不満はない。

ある日のことだった。

いつもより電車が空いていた。

ああ、今日は祭日か……

僕の仕事は祭日は休みはない。

めずらしく席が空いていて座れた。

ピロリンと胸ポケットの携帯が鳴った。

僕はラインを開いた。

『おはよう！良い天気。今日もお仕事よね？頑張ってるね』

やっぱり恭子からだった。

『おはよう、ありがとう』

そう返し、携帯をポケットに戻した。

車内は通勤の人よりどう見ても休日を楽しみに行く人のほうが多かった。

揺れる電車の中、短い嘆息を吐きじっと座っていた。

だが、目の前のカップルがイチャついているのが目に留まった。

.....

僕はさっきしまったばかりの携帯を取り出した。

ラインをタップし、恭子を開く。

『恭子、今日何してるの？』

恭子はすぐに気づいた。

『別に家事してるだけ』

『会える？』

『いいけど、仕事でしょ？』

『定時であがるから夕方からだけど...』

それからしばらく返信はなかった。

電車から降り、改札口を出たところで恭子から返事がきた。

『いいよ、なんとかかなりそう。会おう』

恭子はきっと予定を調整してくれたんだと思う。

『ありがとう、なんか無性に会いたくなった』

『ふふ、疲れてるんだね』

『うん、たぶん・・・』

『じゃあ、いつもの場所に』

『うん、5時過ぎで』

歩きながら、会話をし社に着いた。

なんとなく気持ちが軽くなっていた。

よし、ちゃっちゃと片付けるか！

夕方予定通り、いつもの場所で待ち合わせをしいつものホテルにチェックインした。

部屋に入ると、上着を脱ぎ、部屋の中央のベッドに大の字になった。

僕はようやくリラックスできた。

恭子はそんな僕を微笑んで見ていた。

「きて...」

僕が恭子に言うと恭子も僕の横に横たわった。

恭子は黙って僕を抱きしめてくれた。

柔らかく優しい恭子の胸の中、僕の心がやっと安らぎを感じ、僕の腕はもっとそれを欲しがり恭子ごと抱きしめる。

本当はいけないことだって分かっている。

本当に大切なものはなにかも分かっている。

本当に恭子を愛しているかと聞かれたら、僕は戸惑ってしまうだろう。

だけど、手放せないんだ。

僕にはもう少し恭子が必要なんだ。

ほんの少しの僕の癒しを捨てるほど、僕は強い人間でもないし良い男でもない。

僕は普通の男だ。

恭子の目が甘く僕を見つめた。

僕は恭子の頬を掬い、その艶やかな唇に吸い込まれるよう自分の唇を合わせた。

今、全ての僕の現実が頭から消えた。

しばらくこの夢の時間を漂っていたい。

フワフワと居心地の良いこの胸の中で・・・・

end

2014.5.16作成

シャボン玉

秘めた恋心を抱き続ける女性のお話

私の好きな人は

ずっとずっと変わらない

明日も明後日も明々後日も

ずっとずっと

あなたが好きです

でもこの想いは届かない



薄暗い住宅街でバスを降りた。

バス停から自宅まで私の足で歩いて15分。

なんとも不便な我が家は高台にあるこの辺りではかなり大きな家なのだ。

そう、我が家は昔からある旧家・・・

旧家の次女として生まれすでに三十年と十ヶ月。

私は嫁にも行かずあの家から離れずにいる。

歩きなれた坂道をゆっくりと足を引きずりながら歩いていた。

プップッ～

背後からクラクションが鳴った。

「桜ちゃん！乗って」

運転席でにこやかに笑って声をかけてくれたのは姉百合子の夫、正行さんだ。

「お義兄さん、ありがとう」

私は助手席のドアを開けてあたりまえのように車に乗り込んだ。

「おっ、桜ちゃん本屋に行ったの？」

私の手の中の紙袋を見て話かけてくれた。

「ええ、今日は小説と欲しかった詩集を買ったわ」

「そうか、詩集はいいね」

車ならものの1分の距離だ。

だけど私にはこの1分の時間がどの時間よりも幸福を感じた。

なぜなら私はお義兄さんが好きなのだ。

もちろん、完全に私の片思いだし許されない相手だ。

お義兄さんは婿養子とはいえ姉を愛して結婚した人だし家族とも仲が良いし、私は奪おうなんて気は更々ない。

足の不自由なこんな私は恋人はもちろん恋愛なんてまるで他人事。

だけとお義兄さんだけは違う。

優しくて、こうして私の足を気遣い、さりげなく仕事帰りも合わせてくれる。

思いやりのあるお義兄さんに私は次第に恋心を抱くようになった。

ただそれだけの話だ。

お義兄さんは私の気持ちにはまったく気づいていない。

家族だから大切にしてくれているんだろう・・・

そんなことは分かっている。

車が車庫に入ると、お義兄さんは先に降りて助手席のドアを開けてくれた。

当たり前のように私に手を差し出す。

「ありがとう」

お義兄さんの手を頼りに私は立ち上がった。

お義兄さんの手は大きくてがっしりとしていて私は好きだ。

少しだけ高揚するが態度にはもちろん出さない。

車から降りて、ゆっくり私は家まで歩く。

その間もお義兄さんは手を握っていてくれた。

夕飯は皆家族全員集まる。

我が家は両親に姉夫婦と甥っ子姪っ子・・・と私、7人家族だ。

かなり賑やかな食卓だ。

「ちよっ俺のから揚げ取るなよっ」

「いいじゃん、兄ちゃん油もん食べるとニキビ増えるよ」

「お前こそ太るだろっ」

「私、太ってない〜」

甥っ子の雄太と姪っ子の奈美のおかずの取り合いはいつもの事。

「雄太、私のあげるから」

私は自分のから揚げを雄太の取り皿に入れてやった。

「ラッキー！桜ちゃんありがとっ」

雄太の無邪気な笑顔はよくお義兄さんに似ていた。

縁側で涼みながら詩集を読んでいた。

「お～、今日は月がキレイだな」

風呂上りのお義兄さんが髪を拭きながらやってきた。

「うん、キレイね」

「早速詩集読んでいるのかい？」

「ええ、素敵な詩集よ」

そう答えるとお義兄さんは私の隣に座った。

「どの詩が気に入っているの？」

「シャボン玉」

「いいタイトルだね、読んで聞かせてよ」

お義兄さんは目を細めて言った。

「いいよ・・・」

私は大きく深呼吸した。

シャボン玉

ふわりふわりパチン ふわりふわりパチン

シャボン玉が空に舞う

と息でできた壊れやすい玉

出来ては消え出来ては消え

貴方への想いで出来たこの玉は

壊れやすいから

決して貴方に届かない

それでも私はシャボン玉を作り続ける

フ～フ～パチン フ～フ～パチン

届け届け

届かなくても

届け届け

「・・・・・・・・・・うっ」

私の瞳から勝手に涙が溢れ出した。

「うん、いい詩だ...ありがとう」

私の肩を大きくてがっしりしたお義兄さんの手がポンポンと二度叩いた。

そして立ち上がり、奥の部屋に消えて行った。

私はしばらく涙が止まらなかった。

本当は私・・・

この気持ちを知って欲しかったんだ。

はじめて気づいた・・・

そんな私を黙って見ているのは夜空に浮かんだ月だけだった。

すっかり日が落ちるのが早くなった頃だった。

いつものように背後からクラクションが鳴り、お義兄さんの車が私の横で停まった。

私は当たり前のように助手席に座った。

「もう真っ暗だね」

「うん、ねえ見て今日は満月だよ」

「本当だ・・・キレイだね」

「うん、とってもキレイ・・・」

その後は黙っていた。

二人きりの時間は残り30秒・・・だ。

私は多くを望まない。

このたった1分の幸福の時間さえあれば・・・

完

2014.5.16作成

君と僕と胃袋

目的がなくなんとなく生きている男性の話

きっかけはたいした事じゃない

だけど君と

もうちょっと近づきたい



冷蔵庫を覗くとミネラルウォーターと醤油とマーガリンとソースしかなかった。

僕は腹が減って部屋のあちこちの食べ物を探したが、あったのはいつ食べたか分からないコンビニ弁当の空の容器のゴミと昨日食べた菓子パンの空きビニール・・・結局ゴミしか見つからない。

分かっているが、念の為金も探した。

小銭は昨日かき集めたし、どこにもない。

財布には...42円しかなかった。

食べる事を諦めて起き上がったばかりの身体をまたベッドに転がした。

僕は今、人生のどん底だ。

大学時代を卒業してベンチャー企業に就職したが、二年で倒産した。

その後は色々な仕事をして食いつないできた。

僕は独身だし彼女もいない。

付き合いがいいほうでもないから、親しい友人もいない。

だから普通に働いていればまともに生きていける筈なんだが・・・

そう、このバカな趣味さえなければ。

バカな趣味・・・それはいわゆるギャンブル。

パチンコだった。

今月も給料つき込んで今一文無しってわけ。

その肝心な仕事も昨日首になった。

まあ、たいした仕事じゃなかったが、遅刻が多いとさ。

仕方ない...まあ仕事なんて選ばなきゃなんだってある。

明日は日雇いの仕事にでも行くか。

とりあえず、今日は寝よう...

やる事ないし...

午前11時半、再び僕は顔を下ろした。

ブブーッブブーッ

珍しくアパートのインターホンが鳴り響き、僕は目が覚めた。

ボーっとした頭のまま玄関のドアを開けた。

「こんにちは！すみません、お醤油ありますか？良かったら少しいただけないかしら？」

「ああ、いいっすよ...」

ってこの人誰だ？

頭が回らないまま、冷蔵庫を開け赤い蓋の付いた醤油を玄関で待っている女性に渡した。

「ありがとうございます！！助かります」

嬉しそうに笑って立ち去って隣の部屋に入って行った。

お隣さんか...

そういえばここに住んで一年だが、あんまり隣近所と会わないし、気にした事なんかなかった。

そうか...隣は女か...

ちょっと品のある人だったな...まあ僕には関係ない。

しかし腹が減ったな。

空腹しのぎにミネラルウォーターを冷蔵庫から出してラッパ飲みした。

これで冷蔵庫のアイテムはマーガリンとソースのみになった。

そしてまた僕はベッドに転がった。

でももう眠れない。

暇過ぎだろ...

すると、ブブーッとまたインターホンが鳴った。

なんだよ...今日は珍しいな。

空腹で力のない身体を起こし、玄関を開けるとさっきのお隣さんがニコニコと立っていた。

「あの、お醤油のお礼に良かったらこれ食べて下さい！」

「わっすげっ」

彼女が両手に持っていたものは大量の肉じゃがだった。

イッツアミラクル！！

お醤油が肉じゃがに変身して戻ってきた！！

「いや、今めっちゃ腹減ってたんで感激っす！！」

「それは、良かったわ。田舎から大量に野菜送られてきて...一人じゃなかなか食べきれないし」

彼女は優しく笑って言った。

お隣さんが女神に見えた瞬間だった。

「遠慮なくいただきますっ！」

そう言って、てんこ盛りの肉じゃがの器を受け取った。

「お口に合うと嬉しいな...」

「合います！合います！なんでも合います！」

僕は好き嫌いは本当はないし、今はとにかく空腹な腹を満たしたかった。

「ふふ...あ、お醤油はみんな使っちゃたから今度返しますね」

「ああ、いつでもいいですよ」

「ありがとう」

「こちらこそ」

お隣さんは部屋に戻って行った。

そして僕は肉じゃがに食らいついた。

その肉じゃがは泣けるほど上手かった。

死んだお袋の味のように懐かしい温かさがあった。

こんなの毎日食えたら幸せだろうな...

それだけでもやる気が出るってもんだ。

まあ、僕には一生ないだろうが...

満腹になったせいか、テレビを観る気力ぐらいいは出てテレビをつけてくだらない番組を観ながらゲラゲラ笑っていた。

そんなラッキーな出来事でその日は終わった。

翌朝、日雇いの仕事の為早起きして、集合場所に急いだ。

肉体労働だが金は帰りにもらえるから、この仕事が一番手っ取り早いのだ。

小さなバスに押し込まれ、現場まで行き夕方まで荷物の積み下ろしの仕事をした。

朝、肉じゃがの残りを食べてきたからなんとか頑張れた。

肉じゃがに感謝、いや、お隣さんに感謝した。

仕事が終わる日当の一万二千円を手に入れた。

札を折りたたんでジーンズのポケットにしまい、家路を歩いた。

途中、コンビニに寄ろうかと思ったが、その前にパチンコ屋があった。

少し増やしていこうかと、足が立ち止まった。

その時だ。

「こんにちは！」

振り返るとお隣さんがニコニコ立っていた。

「ああ、どうも」

「今帰りですか？」

「ええ、まあ...あっ俺汚いっすから、離れてください」

急に汚れたTシャツのままだったのが気になった。

「そんなこと、お仕事してきたんだから気にしないで下さい。それよりお醤油買ってきたの！お返ししなくちゃ」

「ああ、いいのに」

「良くないわ、借りたんだもの」

スーパーの袋から赤い蓋の新品の醤油を見せた。

「家に帰ってから渡すわね」

「あっ、じゃあ持つよ」

「いいですよ、他にも色々入ってるし...」

「大丈夫」

「ありがとう...」

そんな会話でパチンコには寄らず、真っ直ぐ帰ることになった。

帰り道、お隣さんの名前は平井 みゆきさんと分かった。

実家は北海道で農業をしている事。

仕事は中小企業の事務員だという事。

僕より三つ上の32歳という事。

バツイチで子供がいなくて...彼氏はいない事

なぜか好きなスイーツはモンブランだって事まで、お隣さんの情報は一気に僕に入ってきた。

「玉置さんは何のお仕事してらっしゃるの？」

さっき自己紹介で玉置 俊樹と名乗ったが、苗字で言われてちょっと悲しくなったが黙っていた。

「見ての通り、ガテン系です」

まさか、日雇いとは言えず誤魔化した。

「それにしても、痩せているわね」

「ははは…」

僕をマジマジと見て不憫そうな顔をしたから笑って誤魔化した。

さっきから誤魔化してばっかだな。

自慢できることが何もない僕だった。

「ねえ、お腹空いたでしょ？今夜一緒にご飯食べない？私も一人で食べるのつまらないし」

アパートの玄関の前で醤油を渡しながらかみゆきさんは親しげに言った。

たった15分の駅からの帰り道でみゆきさんは随分打ち解けてくれていた。

「まじっすか？またみゆきさんの手料理食えるなんて超感激なんすけど、いいんすか？」

「いいわよ！あっシャワーは浴びてきてね」

「ガシガシ洗っていきます」

「じゃあ、後で・・・」

「はい」

「あっ俊樹さん」

「はい？」

「お酒飲める？」

「ええ、強くはないけど...」

「良かった、じゃあちょっと飲みましょう」

「はい」

それでお互いの部屋に入ったんだが...

僕はめっちゃ浮かれていた。

名前と呼ばれたし...

飯と酒だし...

僕は新品の醤油にキスをした。

醤油サンキュー！！

もしかしてなんかもっといいことありそうな予感がした。

そして鼻歌を歌いながらガシガシと風呂で自分を洗った。

僕は一番きれいそうなTシャツを手に取りクンクンと匂いを嗅いだ。

よし臭くないぞ！

それに手を通し、洗いざらしのジーンズを履き、お隣のみゆきさんの家に向かった。

ドアの目の前で大きく深呼吸する。

女の人の部屋に入るのはいくつなっても最初は緊張するもんだ。

僕の場合は滅多にないから特に・・・

ブザーを押すと、みゆきさんは笑顔で迎えてくれた。

同じ間取りなのにみゆきさんの部屋は女性らしく小奇麗で驚いた。

「まだ越したばかりだから殺風景でしょ。先にビールでも飲んで待ってって、ちゃちゃと今作ってるから」

みゆきさんは僕にビールをくれ、キッチンで料理の続きを始めた。

手馴れた手付きでめまぐるしいほど手際良く作り、テーブルの上に次から次へのご馳走を並べてくれた。

僕はそれをビールを飲みながら眺めていた。

「はい、これで出来上がり！さあ食べよう！！」

僕の向かいに座りみゆきさんは手を合わせビールのプルタブを開けた。

「かんぱ〜い！」

「かんぱい」

飲み途中のビールを僕は軽く上げグビッと飲んだ。

「凄いです！こんなご馳走何年ぶりかな」

並べられた料理の数々にマジで感動していた。

「やあね、こんなの簡単なものばかりよ！でも私取り柄はお料理くらいしかないから」

みゆきさんは自分を謙遜した。

「そうなんすか？きれいだし、モテそうっすよ」

「やだあ～きれいなんて言われたことほぼないわよ」

「そうかな～俺には女神に見える」

照れくさいから照り焼きのモモ肉を頬張りながら言ってみた。

「俊樹さん、大げさ！！」

みゆきさんは嬉しそうにでも恥ずかしがってビールをかなり多く喉に通した。

こんな感じで僕達は楽しく食事をし、飲み、笑った。

こんな風に人と食べたのは本当に久しぶりだった。

「やっぱり人と食べるのっていいね...」

「今、俺も同じこと考えてた」

「ふふ...気が合うね」

「そうっすね、はは...」

お互いの視線が絡み合って鼓動が早くなった。

これはビールのせいではなく、みゆきさんの存在のせいだ。

だけど、僕はこういうのに不慣れで、目をそらせてしまった。

「ねえ、これから一緒にご飯食べようよ」

「えっ？そりゃ嬉しいけど悪いつす」

「そう？」

「そうっすよ...」

「そっか...残念」

みゆきさんはガッカリして、ビールを飲みきり立ち上がった。

片付けちゃうね。

「あっ、手伝います」

「いいよ...疲れてるでしょ、ガテン系君なんだから帰ってゆっくり休んで...」

ああ、これは帰れって事か・・・

「・・・・・・・・すみません、ご馳走様でした」

僕はそのまみゆきさんの部屋を後にした。

腹いっぱい身体とアルコールで少しふわりとした身体をベッドに横たえるとさっきの会話がリピートした。

あれってやっぱり誘ってたのかなあ～

でも、毎日タダメシってわけいかないし、僕はなんせ職がない。

僕の方こそなんの取り柄もなく、金もなく、ギャンブル好きのバカなやつだ。

僕にはこういう気ままな暮らしが合っている。

ほんのちょっとラッキーだっただけ・・・

そう思うことにしてウトウトそのまま眠ってしまった。

翌朝、珍しく早く目が覚めた。

早起きついでに今日も働いてくるか！

僕は今日も日雇いの仕事に出かけた。

昨日はお金を使わなかったから、行きがけにおにぎりとお茶で朝食を済ませる事ができ、更に昼も弁当が食えた。

今日の僕は健康的だな。

食べた分だけやる気も出て仕事も手際良くこなせた。

ああ、食べるって大事なんだな...

そんなことを思ったら、夕べのみゆきさんとの会話が頭にチラついた。

いやいや、調子に乗り過ぎだ。

自分の中でそれを否定してもくもくと積荷を運んだ。

帰りに日当をもらい、昨日より少し懐があったかくなり、軽い足取りで家路に向かった。

いつものパチンコ屋の前にたどり着くと、もっと増やせないかと一瞬欲が出たが、それよりももっと気になる店が隣にあった。

それは、ケーキ屋だ。

みゆきさん、確かモンブランが好きって言ってたような...

少し店の前で考えた。

考えた結果...昨日の食事のお礼って事でケーキを買っていくことにした。

またタダ飯にありつきたいわけじゃない。

あくまでもお礼だ。

自分で疚しくないと否定しながら、ケーキ屋に入った。

ケーキの箱にはモンブランが二つ。

僕は大事にそれを持って帰宅する。

途中何度もなんて言って渡そうか、あれこれ考えた。

そして浮かぶのはみゆきさんのニコニコとした嬉しそうな顔だった。

アパートの前までくるととても美味しそうな匂いが漂った。

ああ、この匂いもしかして...

部屋に近づく度に美味しそうな匂いも近づき確信した。

その匂いはやっぱりみゆきさんの家の換気扇から漂っていた。

今日は何を作っているんだろう？

最初にもらった肉じゃがの匂いに少し似ていた。

そんなことを想像しながらもみゆきさんの部屋の前ではやっぱり緊張した。

お礼を言うだけだ。

そう心に言い聞かせ緊張を解そうとしながら、ブザーを押す。

「は〜い」

みゆきさんの明るい声がすぐに返ってきてドアは開いた。

「あら、俊樹さん！」

みゆきさんはニコニコとしてくれた。

「あ、あの...これ良かったら食べて下さい」

「えっ？」

「昨日のお礼です！」

ケーキの箱をぐいっと前に差し出した。

「ああ、ケーキ！しかも駅前のマロンの！」

「はい！モンブラン買ってきました」

「うわあ〜嬉しいっ！ありがとう」

案の定みゆきさんは嬉しそうな顔をし、受け取ってくれた。

「あっ、ねえ今大根とマグロ煮つけてるんだけど、良かったら少し持って行って！一緒に食べるのはもう面倒でしょ？」

と付け加えて言われた。

「え...そんなことないっすよ！一人より二人の方が断然楽しいし旨いっす」

「そうなの？」

「そうですよ」

「でも昨日...」

「当たり前ですよ、タダで毎日気が引ける」

「でも今日はケーキがあるわ」

「そうっすね」

「じゃあ...」

とみゆきさんはちょっと甘えた目で僕を見た。

「シャワー浴びてきます」

「ええ、待ってる」

みゆきさんはケーキを受け取った時よりも嬉しそうでだけどちょっと色っぽく頬を染めていた。

そして今日も僕はみゆきさんの手料理をみゆきさんと一緒に食べて、僕の買ってきたモンブランを食後のコーヒーと一緒に食べている。

「俊樹さん、顔色良くなった」

「そうっすか？」

「初めて見た時げっそりしてたもの」

「ははは...なんも食ってなかったから、みゆきさんのお陰だな」

「ふふ...」

みゆきさんは大好きなモンブランを幸せな顔をして食べている。

「ねえ...」

「ん？」

みゆきさんはフォークを銜えながら、返事をした。

「いいこと、思いついた」

「なに？」

「こうして毎日一緒に食事ができる方法」

「うん...」

みゆきさんは期待してかしこまった。

「毎日、ケーキ買ってくるよ」

「.....バカ」

みゆきさんはみるみる表情が変わって不機嫌になった。

「それじゃ、私デブになっちゃうでしょっ」

「すみません.....」

僕はやってしまったと慌てて謝った。

「あのね.....」

「はい...」

みゆきさんが立ち上がったので僕も反射的に立ち上がった。

「女性がこうして毎日お料理出してるのよっ！わかんないの??俊樹さん鈍感過ぎる！！」

そう言われて、みゆきさんの気持ちが初めて分かった。

僕はバカで...鈍感だ。

「あの...みゆきさんともっと一緒にいたいと思ってます。魅力的だし...キレイだし...お料理上手だし」

「じゃあ、なんで...」

「俺...無職なんす」

「へっ??」

「日雇い労働者でその日暮らし」

「.....」

「だから...なんつか...自分ダメなやつなんで...」

そう言い訳したら...

いきなり抱きつかれた。

わおっどうすりゃいい??

「ダメとかダメじゃないとかじゃなくて、気持ちよっ！私は・・・」

とぎゅっと更にしがみつかれた。

「好きです...ダメは関係ないなら、みゆきさんともっと一緒に過ごしたい」

みゆきさんよりも先に僕が言った。

いや、言わなきゃと思ったんだ。

ちょっと今日のTシャツの匂いが気になったけどみゆきさんを抱きしめた。

僕よりずっと小さくてビックリした。

そして愛しさが込み上げて、とても優しい気持ちになれた。

「一緒にいてね・・・」

「うん・・・一緒にいよう」

一人の時には味わったことのない幸福感に満たされた瞬間だった。

この気持ちを大事にしよう。

小さな身体を包み込む僕の腕は益々強くなって心に誓った。

みゆきさんを大事にしようと・・・

そうして、僕は一気に人生が変わり始めた。

リア充の力って凄い。

今は小さいけれど近くの運送会社で働いている。

もちろんパチンコなんてやめたさ。

だって仕事が終われば腹が減る。

早くみゆきの作った料理が食べたくなるんだ。

こうして、アパートの階段を上がる、いい匂いがしてくる。

おっ今日はカレーかな？

ワクワクしながら、ドアを開ける。

「ただいまあ〜」

「おかえりなさい〜い」

みゆきはニコニコと嬉しそうに出迎えてくれた。

「今日はカレーだよ」

やっば当たり！

End

2014.5.22 作成

あとがき

最後まで読んで下さりありがとうございました！！

古い作品から新しい作品までぎゅっと押し込めてみたんですが、順番は作成した順なので、とにかくドキドキしたり涙が出たり、呆れたり？笑

バラエティーに飛んだ短編集になりました。

大人になってからの恋愛って学生の頃とは違い出会いの場が広がるし、環境も様々になります。

その背景と抱えているものと皆違う。

恋愛感もまた違ってくると思うのです。

色々な状況があって色々選択していく。

いつでも思い通りになんていかないものです。

この10話のストーリーは全く違う内容ですが、でも根っこの部分は実は同じで、

人は条件で人を好きにはならない。

無条件に相手を想ってしまう。

これが恋というものではないでしょうか？

そんなことをこの短編集を書き上げてふと思いました。

なんとなく、恋に迷った時、恋したいと時この小説を読んで頂けたら嬉しいです。

ちょっと大人の皆様にこの小説を捧げます。

2014.5.22

キミイ

ちょっと大人恋のお話短編集

<http://p.booklog.jp/book/85866>

著者：キミイ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kimiynoheya/profile>

AKHTAR AHMAD 表紙 Photo RoPi イラスト

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85866>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85866>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ